

拝啓 今年も早や2月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。港北ニュータウンの北山田に小さな梅林があり、2月12日に散歩の会の友人とそこへ出かけて観賞しました。紅梅、白梅がきれいに咲いていてちょうど見頃でした。

今回は、小西芳之助先生の『わが主イエスよ—恵心流キリスト教・説教集—』の3回目で、「第3講 信者生活第60年・伝道者生活第30年所感」からの引用ですが、この説教は特に力のこもった説教のように思い、引用するところが多く、10ページを原則としているエンカウンターが今月号は14頁になりました。

7ページに、「内村先生が、君たちは分からなくてもよろしい、ぼやぼや聞いていてもいい、覚えておれ、死ぬときに間に合う。私はこの死ぬ時に間に合う、臨終のときに間に合うというものが、私はこれが宗教だと思う。これが宗教です。

…そうでありますので、死ぬときに役立つような、そういうものを宗教という。そして、死ぬときに役立つというそのことが、我々現在と無関係に思っておりますけれど、そうではない。現在の我々の悲しみ、苦しみのときに、それが役に立つ。やってみたまえ！ 主の名を呼ぶことを。自分の現在の、この世の達者なときの悲しみ、苦しみに役立つ。その時に役立たないようなものだったら、死ぬときも役立たないですよ。我々は宗教といったら死ぬときのように思っておりますけれど、本当に死ぬ時に役に立つものは、現在の悲しみ、苦しみに勝つ力を持っている。それを宗教という。」とありますが、内村先生、小西先生の言葉を信じて、やってみるよりほかはありません。

エンカウンターの今月号の原稿を書き終わった時、朝7時45分ごろ、本誌読者の米倉安雄さんから電話をいただき、入院したという知らせでしたので、その日の午後、新浦安の病院に「エンカウンター」の原稿をもって、お見舞いに行って来ました。

ピリピ書とコロサイ書の原稿を、本誌読者で高円寺東集会の佐藤文男さんと小西忠雄さんに手伝っていただいて、編集できたので、2月21日、出版社であり印刷所でもある横濱大氣堂に渡すことができました。本ができるのは、5月か6月頃でしょう。

雑誌『潮』に連載が完了した南原繁先生を主人公とする歴史小説『夏の坂道——南原繁の日々』の作者村木嵐さんと、3月2日高松市で開かれる講演会で一緒に話すことになっており、2月14日(木)、潮出版社で、打ち合わせをしました。私の書いた『南原繁の生涯』はあまり広く読まれませんでしたが、『夏の坂道——南原繁の日々』は歴史小説ですから、広く読まれて、南原先生が広く知られるようになることを願っています。

2月18日(月)は、村野憲政さんの呼びかけで、本誌読者の松本健さんに国際文化会館のお庭と建物を案内して頂いたあと昼食会がありましたが、温かい晴れた日で、お庭の散策には絶好の日よりでした。

もうすぐ温かい春が来ますが、まだしばらく寒い日が続くと思います。皆様風邪などひかれぬようご自愛くださり、元気にお過ごしください。

2019年2月22日

山口周三

エンカウンターの読者各位